
ノベレイト

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノベレイト

【Nコード】

N1569W

【作者名】

鏡花水月

【あらすじ】

人々が物語を紡ぎながら生きている世界「ノベレイト」そこに住む少女・ミレイは引きこもりがちな鬱少女であった。だが、彼女を取り巻く人々によって、何かが変わる。

Prologue

この世界の文学史は、長い歴史を持つ。文学 所謂小説と
いうと、文字という記号が最小単位だが、その文字自体には、四千
年、エジプト文明、エウフラテス文明、インダス文明、黄河文明の
四大文明から始まる経常の歴史がある。そこから、世界最古の文学、
「イリアス・オデュッセイア」や、今や全世界で読まれる恋物語の
ベストセラー「源氏物語」、中世の名作「ロビンソン・クルーソー」
や「オペラ座の怪人」。二十世紀に入ってから、ロレタリア「桜の園」や大
正労働文学の代表作「蟹工船」がその名を人の心に刻みつけていっ
た。

その歴史の流れの中で人々は、「人が小説を書き、その為だけに
生きている世界」、所謂別世界の存在を信じるようになった。最初
に信じた者がその思想を述べた時、人々は

「そんな世界がある筈が無い」

と鼻先で笑った。だが、神はその人々の考えをも裏返した。西暦
1901年。二十世紀の始まりの年、アメリカで一人行方不明者が
出た。何故消えたのか。何処へ行ったのか知る者はいなかった。三
十年の時を経て、その人は帰ってきた。そのときには、原因不明の
行方不明者は世界の至るところ、特に当時で言う列強という国々
には何百人も確認されていた。その中には、最初の人のように、生き
て帰ってくるものもあれば、いつまでも失踪したままで、人々の記
憶の中から露もいなくなってしまうものもいた。帰ってきたもの
たちから話を聞いたところ、彼らは小説を紡ぐがために在る世界「
ノベライト」へ転身していたらしい。ノベライト、とは何か。どう
やってその世界を知ったのか などと続けざまに訊かれるこ
とはなく、皆失踪した折に頭をやられたのだろうと思われるだけ
であった。だが、その中にも彼らの話に興味を示し、ノベライトのこ
とを訊いて、その世界を深く知って、遂にはノベライトへ転身する

者も現れた。2011年現在、ノベレイトの住人、約165万人也。

1・ノベレイトの住人

ミレイ・クヴェイティナ・アクアムーンは「ノベレイト」に住んでいる。華奢な体が纏うのは、黒い髪が肩まで縁をとる、赤いカーディガンに黒いリボン。膝を隠すか隠さないほどの長さを持つ、ベージュのスカート。顔立ちは、白い肌に一点の曇りも無く鼻筋も通っていて、端正なものだが、二重の綺麗な形をした目は暗い影を落とされ、彼女が卑屈な性格であることを想像できる。

「テシンはそこから宙に浮いた岩を蹴って、普通では到底届きそうもない岩の上に乗った。そして……」

彼女の白く細い指が、本のページの上に万年筆を走らせる。ページには文字自体は書かれておらず、二十×二十のマス目が縦横に線走らせているだけだ。だが、彼女が文字を一つのマス目の上に乗書いた時、文字がそこに表記され、そのマス目だけ、区切りが消える。尤も、他の文字と隣接しているマス目の線に限るのだが。

「だが、キュアンはテシンについていけるかいけないかのギリギリだった……」

そこまでミレイが呟いた所で、指がひたと止まった。そして、目を伏せ俯き、ハアと溜め息を吐いた。

「どうしよう……この後の展開が全く思いつかないわ……」

と言つて、これまで文字の羅列でページを埋め尽くしてきた本の山を振り仰いだ。

「私つて、ダメだなあ。今まで、いくら書いても書いても読んでくれる人はたった数人しかないし。他人の小説に感想書いて送つても、全く言いたいこと言えてないし。何でこんな世界に来ちゃったんだろ？ 元の世界に戻ろうかな……でも、元の世界でもダメダメだったからノベレイト^{（こゝ）}に来たのに……戻っても仕方ないわよね……」

ずつとブツブツ愚痴を垂れこぼしながらうなだれるミレイ。

現代医療で言う鬱なるものにかかっていたミレイは、生来の自己

嫌悪と卑屈さがあい混じり、社交性皆無、話術低能という、典型的な引きこもりの特徴を持っていた。

「やだよあ、もう。死んで消えたい……」

鬱屈とした単語をつらつらと口から吐き出す。

「何で神様は私みたいな人間を作ったんだろ。生きる価値なんて私にはないのに」

と、言いつつも怖すぎてリストカットの一度もしようと思ったことはない。その意気地の無さにまた自己嫌悪に追い詰められているミレイの耳を、金属同士がぶつかり合ったような号音がつんざいた。~~~~つ！！ サ、サリアスね、その音は！」

耳を塞ぎながら眉をあらん限り寄せて音のした方を向く。そこにいたのは、サリアス・クリアティス・フォームル。彼女の親友で、ミレイがノベレイトに来て初めての知り合いだった。

「もう、ちよつと目を離したらこれよ。何でアンタは死にたいとかそういう言葉がナチュラルに口から出るのかしらね？」

語調から読みとれる通り、サリアスはミレイと違って強気な性格で、とても社交的だ。

桜色の唇は強く尖り、切れ長の目に沿うように通る鼻。肌はミレイよりも健康的な色で、それを覆う袖が無いトレーナーとTシャツの重ね着に、短いGパンをという組み合わせ。ミレイが某名家の令嬢だとするならば、サリアスはおてんばで勝気な少女だった。

全く正反対の二人だが、何故か仲は良好である。今まさに、サリアスが何の前触れもなくミレイの家のドアを開け放ったことがその証拠だ。普通なら、ドアを叩くところを彼女はあたかも自分の家のように何の気なしに開けた。ミレイはそのことに関して言及はしない。したところで効果は薄いと知っているからだ。

「だって……書いても書いても誰も読んでくれないんだもん」

「あんだ、最初はこれ以上筆が進まないって言って嘆いてなかったかしら」

「そこから聞いてたの!？」

メールは頷き返す。ミレイの性格上、サリアスが家を訪ねても雰
囲気的に中に入れずに、二の足を踏むというのは多々ある話だ。

「しょうがないなあ……で、今日は何の用？」

ミレイが本を机の引き出しの中にしまい込むと、唐突に腕を掴ま
れた。

「え？」

「アンタを外に連れ出して来て欲しいっていう人がいるから連れ出
しに来た。それだけよ」

「ええっ、でも私あまり外に出たくない……」

引つ張つていこうとするサリアスに、必至に抵抗するミレイ。余
談ながら、サリアスもミレイ同様華奢な体つきだ。だが、彼女は並
の男以上に力が強い。至極当然ながら、普段運動不足気味のミレイ
が勝てる相手ではない。

「ちよつとは陽の光を浴びなさい。モヤシ人間」

「わーっ！ やめて！」

ミレイは、さながら歯医者に無理矢理連れて行かされそうになる
子供のようにメールに引きずられていった。

¶

あまり他人に顔がきかないミレイは、ノブレイトの殆どの人間と
初対面だった。更に悪いことに輪をかけて、彼女は初対面の人間と
の会話を頑なに拒んでいた。サリアスでさえ、彼女が始めて口を聞
いたのが出会って3ヶ月目という有様である。今日の前噴水に座
っている少年は、幸いなことに初対面ではない。

「はは、何だか無理矢理外に連れ出されたみたいだね」

少年は白い半袖のポロシャツに灰色のスラックスという、二ホン
という国の高校生のような出で立ちだった。ミレイに引けをとらな
いくらい白い肌、サラサラの髪。繊細な顔立ちの紅顔美少年だっ
た。名前をイズミ・ヒメユキという。

イズミは少女のような顔立ちに苦笑を浮かべて言った。

「ミレイ、いきなりで悪いけど、頼みがあるんだ」

「私以外の人に頼んでよ」

ミレイは強制的に外に連れ出された為に、不機嫌になっている。

暗い色の目を伏せ、更に暗い雰囲気を醸し出している。

「それがダメなんだ。実はヒノムラさんに関わることです」

ナナミ・ヒノムラ。ミレイの数少ない知り合いである。

「え？ ナナミがどうしたの？」

「“人間失格”を見つけたとかわけのわからないことを言いだして、大変なんだよ」

『いつものことでしょう』

チェコ共和国にありそうな中世風の街並みで見事に協和音を響かせるサリアスとミレイの声。

「どうせ、オサム・ダザイの人間失格を見つけたとか言っくんじゃないの？」

「それか、その盗作じゃない？ 前にも、某国の兵士がわけの分かんない正義を振りかざして女性の所持品を奪うっていう作品が盗作扱いでノベレイトの管理者から消されていたじゃない。リュウノスケ・アクタガワの羅生門の盗作だったかな。作者もノベレイト永久追放処分を受けたって聞いたわよ」

サリアスとミレイが順番に推測を述べる。だが、イズミは2回とも首を横に振った。

「うっん、そうじゃないらしいんだ」

「じゃあ何よ？ アタシさっさと帰りたいんだけど」

サリアスが早くもいらいらした様子で急かした。それに対し、イズミは

「……屋上で、首吊り自殺を試みた人を引き留めた、ってメールに書いてあったよ」

ミレイの方が大きく、ビクンと跳ねた。

1・ノベレイトの住人（後書き）

ミレイ・クヴェイティナ・アクアムーン Mealey Kuve
itina Aquamoon

サリアス・クリアティス フォームル Sarias Clear
tice Fumuru

イズミ・ヒメユキ 姫雪出美

ナナミ・ヒノムラ 日野村奈々美

2・あの日、彼は

“人間失格”

ノベライトが創世されて47年後。即ち、西暦1948年に発表されたオサム・ダザイの小説。だが、ここでミレイ達の話題としての人間失格はその小説のことではない。

彼等がいるのは、町はずれの小さな赤い屋根の家。ナナミの家だ。「そうなんだよ。ボクが教会の懺悔室に来てみたらロープぶら下げて首を吊ろうとした人がいてさ」

一人称は「ボク」であるが、れっきとした女の子。それがナナミ・ヒノムラである。肩の上で切りそろえられた髪に、輪郭がはっきりした顔立ち。オレンジ色のシャツにGパンを履く、ボーイツシュという表現が適切な少女である。

「そこまでは信じる。ただ何故そこから人間失格に話が跳躍するのだ？」

冷静な面持ちで返したのは、ステイブ・ホワイト。ナナミの、所謂彼氏である。がっしりとも華奢ともならない体格に、癖のかかった金髪に、堀の深い顔に埋め込まれた碧眼。イズミ同様、整った顔をしている。あまり目立たないルックスのイズミと違い、界隈の女の子に、そこそこ人気のあるステイブ。しかし、彼が選んだのは残念ながらナナミである。ナナミも、綺麗な顔をしているのだが、彼女には妄想と言う悪癖があった。今、人間失格と喚んでいるのがその証拠である。

「……い、いつもの妄想なんじゃない？」

ミレイが臍げに呟くと、ナナミはその決めつけはならんとばかりに身を乗り出し、猛烈な勢いで喋りはじめた。

「そうじゃないよっ！　ただ、引き留めた後にその人の顔を見たらお面みたいに感情が抜けてたんだ！」

「きゃあ!？」

ただでさえ気の弱いミレイ。彼女の腰を抜かすには十分すぎる勢いだった。

「ちよつと、アンタハイになりすぎよ。落ち着きなさい」

「ははは。でも、お面みたいに感情が抜けていた……太宰治みたいだね」

イズミが苦笑しながら言った。

「だよな？ イズミもそう思うよね？ ほら、賛成してくれる人がいたよ！」

イズミは苦笑半分、呆れ半分の微妙に引き攣った笑みを浮かべた。それは心なしか辟易していた。

「別に、君が正気であると思ってるわけじゃなくて……太宰治……は、説明しなくても分かるよね。『人間失格』や『走れメロス』とか。で、『人間失格』では自分のことを“道化師”と称していたんだ」

「道化師？」

「そう。自分が“他人と同じ感情を共有できない”化け物であることを隠すための道化だと。尤も、太宰自身が本当にそうだったかは知らないけどね」

他人と同じ感情を共有できない、というのはどういうことなのだろう？ ミレイが首を捻っていると、ステイブが詳細な説明を述べた。

「空腹の感覚……それを主人公は理解できなかったそうさ。それだけではない。近しい者が死んでしまつて、周りは皆悲しいと感じているのに、自分は悲しいと思えなかったそうさ。他にも、周りが嬉しいと感じているのに自分だけ嬉しいと感じられなかったり……感情がない、というわけではなく、他者と同一の感情を抱けなかったそうさ」

「他者と同一の感情を抱けない……？」

ステイブの言葉を反芻したナナミに、イズミが説明を引き継いで答えた。

「そう。でも、それが明るみになると、自分は人外の化けものであると思われてしまう。それは避けたかったから、周囲に合わせて振舞う、仮面を作った。化け物である自分を隠すための道化師となつてね。でも、それで皆を騙しているという罪悪感がさらに主人公を苦しめたんだ」

「……そこまでして、人は生きていけるのかしら」

「生きていけなかった」

イズミが、陰鬱な表情で答えた。あたかも、「人間失格」の主人公を演じているかのように。その表情を見た瞬間、ミレイは底の無い穴を永遠に落ちていく覚悟を落ちて行くときの感覚を感じた。

「人間失格の主人公は自殺して、物語は結末を迎えている。同時期に、太宰も本軸世界の二ホンの玉川上水で当時の恋人と入水自殺したんだって。……話は飛び過ぎたけど、とりあえず感情を抱けないという面と自殺、という面から考えて、ナナミはその人を人間失格って言ったんだね？」

本軸世界、つまり元の世界の出来事であつて、この、ノベレイトで起こったことではない。それに、50年以上も前の出来事だ。なのに、この話によつてナナミの家の空気がプラス1トン程重くなった。ナナミはその根源であることの後悔から、悲しげな表情を顔に貼り付けて頷く。

「……ナナミ、その自殺未遂者はどこ」

常より幾らか鋭い剣幕を作つてサリアスがナナミに尋ねる。

「……ちよつと危なそうだったからさ、ジュピターさんのところに連れてきて監禁してあるよ。ジュピターさんは精神異常者と思ひ込んでるみたいだし」

ジュピター、とは本軸世界ではローマ神話の最高神。この世界でも、その名を借りてノベレイトを管理している、神と呼ばれる存在。本軸世界の人間がノベレイトへ転身を志望したとき、その転身を許可したり、ノベレイトで問題を起こした住人を本軸世界へ追放する……そんなことを毎日行っている。

だが、ナナミが気軽に訪れて人間を預けたところからみるとそう遠い存在ではないらしい。

「そう、妥当な選択ね。アタシ、ちょっとこれからジュピターのところへ行ってくるわ」

サリアスはそう言うなり立ち上がると、皆の次の言葉も聞かずにナナミの家を飛び出した。

「ああ、待ってよサリアス！」

ミレイが立ち上がって彼女の後を追う。だが、体力の無さも手伝ってか、すぐに力尽きてしまった。体を腰と膝の部分で折って、強く咳き込む。

「ミレイ……」

すぐ後から、イズミが追ってきた。

「走る必要はないよ。ジュピターの所へ行くのは分かっているんだから」

ミレイは、泣きそうな顔でコクリと頷いた。

3・走る戦慄

「ジュピター！」

宇宙空間の中に浮いた硝子の床。装飾の一つすらも無い。そこに若い男性が立っていた。男性の名こそジュピター。ノベレイトの管理人である。裸身に纏った一枚の白い布。頭に王冠を被った姿は、さながらギリシャ神話の大神ゼウスのようであった。

彼の目の前には、一枚の宙に浮いたスクリーンがあり、先程彼の名を呼んだ少女の顔が映し出されている。 勿論、サリアス

である。噴水広場に設置されたこの場所とノベレイトとを結ぶ通信機器の前に立つ彼女はジュピターに叫びかけた。因みに、彼が宇宙空間にいて食事その他諸々のことはどうなっているのか不明である。

「あ……どした？」

「前に、ナナミが来なかった？」

見た目とは裏腹に、気の抜けたニートのような声で応対するジュピターを、サリアスは気にする様子も無く訊いた。

「ナナミって……あの胸のデカイアイツか？」

男性の妄想を、倦怠的な表情を歪めずにさらりと言っただけのけるジュピター。

「……その思いだし方は止めて変態神。で、来た？」

ナナミと同じ共通点を持つサリアスは不機嫌そうに眼を伏せると、焦りを見せた表情に戻し、再び訊いた。ジュピターは暫し考え込んだ。ナナミが最後に来たのは……昨日のこと。そう言えばその時……。

「ああ、来てた。何か変な奴も連れてたな」

瞬間的にサリアスの表情が強張った。

「……！ そいつに会わせて！」

「……どうした？」

「良いから！」

ジュピターは、首をかしげるとまあいいか、と言いたげに鼻から一息を吹き出して、右手の人差し指を上方に突き出した。そこから、眼を瞑らんばかりの光が溢れる。

「コイツね……」

サリアスの目の前に現れた男性は、端正で穏やかな顔立ちをしていた。だが、その顔に彫り込まれた苦悩は大きいようで、暗く沈んだ表情だった。

「サリアス、その人を呼び出してどうする気なの？」

ようやく追いついたナナミが背後から訊ねる。その横にステイブが並んだ。怪訝そうな顔つきだ。サリアスは、息を切らしながら答えた。

「だめよ、コイツは……放っておいちゃだめ！」

「どうして！？ ボクの部屋にいる間、ずっとロープをかけて死のうとして、大変だったんだよ！ ジュピターさんの隣鬼に任せておいた方がいいじゃない！」

隣鬼りんぎ、とはジュピターがノベレイトで作り出した下僕のことだ。

ノベレイトの世界では、人間は小説を書く以外に仕事がない。他の、生活に必要な仕事をしているのが、隣鬼というわけだ。

「だめ、コイツはダメなの……隣鬼に預けたら、絶対ダメ！」

サリアスは、狂ったように、何かに取り憑かれたように、必至にナナミの提案を拒絶する。その後ろに、息を切らせて今にも倒れそうに肩を上下しているミレイと汗を幾筋かは垂らしているが、隣のミレイよりは大丈夫そうな状態のイズミが走ってきた。

ステイブが眉根を寄せてサリアスに問いかける。

「サリアス、どうした？ 何故隣鬼に預けてはいけないんだ？ 何か……心当たりでもあるのか？」

ステイブは、サリアスの古傷を抉る行為をしているという自覚があるからだろうか。最後の一言を身重に言った。それに対し、サリアスは悲しげに目を伏せ、黙りこむだけだ。恐らく、ステイブの問は合っているのだろう。

「ダメなのよ…… 燐鬼じゃ、助けてはくれない……」

その時、サリアスの前にいた男性がぼそりと呟いた。

「貴方ですか……私を、連れ出してくれたのは」

その声は、表情以上に起伏に欠け、機械のように、ただただ義務を全うしているだけのものだった。男性の顔は、ただただ暗いのではなく、感情が籠っていないのだった。

「……サリアス？」

ミレイが問いかけるが、サリアスは振り向きもしない。男性は、その横をひっそりと通り過ぎて行った。

「サリアス、何があつたんだ？ 何が君をそこまで焦燥させるんだ？」

サリアスは、唇を噛んで動こうとしない。どう見ても、様子がおかしい。何かがあつた 言わずもがな、ここにいる全員が悟

る。今のサリアスは、さながら懺悔を行う囚人のような表情をしていた。イズミが、拉致が明かないと言いたげに男性に話を振った。

「えっと……失礼ですが、お名前を伺えますか？」

「私ですか？ ……イサム・フクオカです」

淡々と、テンションの上下もなく名乗る男性。ミレイは、恐怖、という感情を覚えた。

「福岡勇さん、か…… 太宰治の名前をなぞつたんだらうな」

イズミの家。サリアスは、ナナミとステイプに連れられて暗い顔のまま帰宅し、男性はジュピターの元に戻された。後にはミレイとイズミだけが残された。イズミはダイニングテーブルの椅子に座ると、ミレイにも彼の向かい側に座るよう促して、この解説を始めた。

「え？ でも……共通点は治と勇、くらいじゃない？」

ミレイはイズミの言葉を理解しかねて訊いた。イズミは元々二ホン国で学生をしていた。太宰と同じ国に住んでいた為、イギリスに

住んでいたミレイよりは二ホンについての知識はある。

「うん、勇は文字通り「治」を擦ったもの……そして、苗字の福岡も「太宰」からとったんだろっね」

「え？」

福岡という単語の何処に太宰という単語の要素があるんだ、とミレイは訊ねようとした。だが、それを遮るようにイズミが解説を続ける。

「福岡、というのは二ホン国の地名だよ。九州地方……って言うてもミレイには分からないかな。まあ、それはいいとして、福岡の中部……そこは今は筑豊と呼ばれているんだ。そこは、かつて二ホンの都と同じ機能を持った政権が置かれていた。その政権の名前は……」

ミレイに、イズミに、一抹の沈黙が走る。一呼吸置いたのちに告げた。

「大宰府」

瞬間、今までにないほど強く、ミレイの心臓が大きく撥ねた。二秒と経たず、ある予想がつく。その予想は、ありふれていて、誰もが抱いてもおかしくはないだろう。

フクオカさんは、オサム・ダザイなんじゃないの？ だが、ミレイはオサム・ダザイが半世紀程前に自殺したことを思い出してその予想を頭から追い出した。そんなミレイの予想を、イズミは見抜いていたのだろう。いきなり立ち上がり、本棚まで歩いていくと、一冊の本を取り出し、振り返った。その拍子に前髪がさらりと揺れる。

「オサム・ダザイの写真だ」

彼は、ゆったりとした笑みを浮かべたままその本の表紙を捲った。そこには、若干老けた男性が、苦しげな表情をして、頬杖について顔をアップにした写真が載せてある。ダザイ本人の写真だ、とイズミは説明した。ミレイ達が、噴水広場で会った男性とは似ても似つかない。ということは、彼は人間失格に憧れ、わざと「周囲と同じ

感情を共有できない道化師ビエロ」になっているのだろうか？ ミレイがその案を言つと、イズミは首をかしげた。

「分からない。でも、周囲と感情を共有できない、という病気はあるみたいだ。『協調拒否症候群』と呼ばれているみたいだね」

3・走る戦慄（後書き）

今回登場した「協調拒否症候群」は作者の創造です。実在はしません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1569w/>

ノベレイト

2011年9月20日03時26分発行